

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

②国際シンポジウム等の開催

《人社系》

●長崎大学経済学研究科経済経営政策専攻

「新興金融市場分析の専門家育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・本研究科が毎年主催してきた国際カンファレンス “International Conference on Asian Financial Market” に院生セッションを設け、学生には研究成果の報告を課した。これにより、高度な専門性をもった調査研究能力の育成と同時に、国内外の研究者による助言指導を受けることによって、修士論文の質を国際水準で保障することが可能になると同時に、英語による報告と質疑を通じて、専門分野の高度な英語運用能力の向上が図られた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・「アジア市場分析Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の講義や東京研修・中国でのフィールド研究の研究成果をまとめることに加え、英語運用能力の向上のためにチューター等による英会話のプログラムを実施した。当初は、本学に留学している学生をチューターとして雇用して、本取組に参加する個々の学生に一人ずつチューターを配置したが、個々の時間調整等の事務作業が煩雑だったため、非常勤講師を雇用して、入学後の早い時期からの実施に変更した。講師には、英会話だけではなく、国際カンファレンスでのパワーポイント等のスライドの構成、発表の仕方などを丁寧に教えてもらうことができた。
- ・1年次生も国際カンファレンスに参加することによって、ファイナンス分野の最新の研究動向や英語による報告や議論の仕方を学ぶとともに、どのような助言指導がなされているかを学ぶ機会とした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・国際カンファレンスでは、パワーポイントの作成や発表の仕方等について事前指導を受けることによって、学生は効果的な発表を行い、国内外の専門家や研究者とも質疑応答をすることができた。
- ・学生のアンケートでも、学生からは、達成感を感じたとか、自分の成長を感じたなどの感想があり、満足していることが伺えた。また、国際カンファレンスに参加した研究者からも、「修士課程の学生とは思えない」とか「興味深い内容である」という良好な評価を得ることができた。
- ・この成果を基に、学生は修士論文を英語で執筆した。
- ・本取組に協力する西南財経大学とは、2010年から本カンファレンスの共催となった。2012年度については、西南財経大学で開催する予定である。さらに、韓国の中央大学校においても、2013年度に開催する予定となっている。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

●早稲田大学法学研究科

「法学研究と法律実務の統合をめざして」の事例

(具体的に何を実施したのか)

2008年度には、シンポジウム「法理論と法実務の統合——教育的側面を踏まえて」を開催し、法科大学院の設置にともなう法学教育改革の激しい変動の中で、いかにして法理論と法実務を統合していくかという課題につき検討した。2009年度には、シンポジウム「研究者教員の養成はどうあるべきか——法理論と法実務の統合」を開催し、法科大学院においても研究者教員の存在は今後也不可欠であり、その課題に研究大学院がいかに応えるかという問題につき検討した。2010年度には、シンポジウム「法律教育と研究大学院および法科大学院——研究者教員の養成を見据えて」を開催し、総まとめのシンポジウムとして、学者出身の最高裁判事2名を含む講演者を招聘した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

法科大学院の導入後、今後の法学研究者養成あり方について、わが国全体で議論されるようになったが、その際、法学研究科、特に修士課程の存在意義自体が疑われたようになった。そこで、法学研究科の意義を問い、研究者の養成をいかにして行うか、問題意識を共有する教員・実務家に参加してもらい、多角的に議論した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

シンポジウムを通じて追及した論点は多岐に及ぶが、中でも、法科大学院が登場した後の研究者養成について、当法学研究科で5年間一貫して博士論文を作成するために集中して比較法・基礎法・実定法解釈論をじっくりと深く学ぶことが絶対に必要であることが確認できた点、大きな成果が上げられたと考える。有力な大学が修士課程を廃止し法科大学院に統合していく中で、修了することが研究者への近道と考えられこともあったが、やはり研究者を養成するには、研究大学院における修士課程・博士課程の一貫した養成システムが明らかに優れていることが確認できたのは有益であった。その意味でも、修士・博士一貫教育システムを構築した当研究科の我が国における法学研究者養成における意義は大きいといわねばならない。

《理工農系》

●筑波大学システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻

「ICTソリューション・アーキテクト育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

海外組織でのICTに係わる動向についての知識を深め、国際的な視野を広めると共に、ICTに関する国際的な発信力を高めることを目的として、ICT国際交流ワークショップを、授業の一環として開催した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

単に学会に行って講演したり聞いたりするだけではなく、レセプションやランチ、ポスターセッションなどで、また運営に参加することで、外国の学生・研究者と実際に交流する機会を与えるよう工夫した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

筑波で開催した第1回ワークショップには、約100名が参加した。一般の学会等ではとなく消極的な学生達に、交流する機会を与えることができた。北京で開催した第2回にも本学から約10名が参加した。ワークショップには3大学が参加したが、組織的な交流を継続することとなり、第3回ワークショップがH24年秋に予定されている。このほか、研究分野でも交流を進めたり、新たな大学の参加も期待される等、国際交流が発展している。

●岐阜大学連合獣医学研究科獣医学専攻

「グローバル化に向けた実践獣医学教育の推進」の事例

(具体的に何を実施したのか)

岐阜大学連合獣医学研究科とソウル大学獣医学部の間で、2回にわたりジョイント・ワークショップをソウルと東京で相互に開催し、研究の相互理解と共に人的交流に貢献した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

ソウルで開催した第一回目では、これまでに開催実績がないことから大学院生の参加希望者が少なく、開催に当たり出席者の確保に苦労した。また、出来る限り旅費及び宿泊費の支援に配慮した。東京で開催した2回目は、参加者も順調に伸び、交流も円滑に進んだ。特に、開催に至るまでの準備に多くの労力を割くことから、相手大学との交渉や対応に苦慮した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院生の積極性が目立って顕著となり、英語による受け答えもうまくなった。また、積極的に海外研修等に出かける学生も多くなり、国際性を修得するのに役立った。

●岡山大学環境学研究科資源循環学専攻

「アジア環境再生の人材養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・本プログラムの実施に際しては、各年度末に履修生による成果報告を行うとともに、事業推進における助言と評価を得るために、平成20年度～22年度の各年度において「アジア環境再生コロキウム」を開催した。開催結果は以下の通りである。

第1回：平成21年3月19日開催、10ヵ国から16名の研究者を招聘

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

第2回：平成22年2月23日開催、11カ国から25名の研究者を招聘

第3回：平成23年1月24日開催、10カ国から15名の研究者を招聘

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・学生の履修成果については、アジア環境再生コロキウムにおいて学生自身が英語で発表するとともに、開発途上国からの招聘者と討議する機会を設けた。
- ・アジア環境再生コロキウムでは、学生による成果報告だけでなく、「アジアにおける環境教育」や「持続可能社会のためのIT活用」をテーマとするパネルディスカッションも開催し、開発途上国の大学関係者との間で今後の学生交流やITを活用した交換講義などについて意見交換が行われ、有益な助言を得た。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・アジア環境再生コロキウムにおける英語による学生の成果報告や海外招聘者との討議は、受講生の国際的リーダーシップ醸成に有益であった。
- ・「アジアにおける環境教育」や「持続可能社会のためのIT活用」をテーマとする討議を通じて、開発途上国の大学及び研究機関との学生交流や交換講義について、期待と課題を把握することができた。

《医療系》

●三重大大学医学系研究科生命医科学専攻

「国際推薦制度による留学生教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

2011年1月24、25日に海外から多数の演者を招き、英語による国際シンポジウム「医学教育・研究の国際化推進シンポジウム－生体侵襲ダイナミクス－」を本学講堂にて開催し、国際推薦制度による留学生教育の活性化を図った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

演者の人選と聴衆の確保、質疑応答が活発に行われるような雰囲気作り。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

活発な質疑応答によりシンポジウムが大いに盛り上がり、また、内外の人的交流が深まったために、次回開催の機運も高まり、将来につながる国際教育・研究の活性化が得られた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

●広島大学医歯薬学総合研究科創生医科学専攻
「バイオデンティスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

毎年度計3回にわたり国際ワークショップを開催し、研究および教育分野の意見交換の場を設けた。平成20年度162名、平成21年度244名、平成22年度284名の参加があった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

使用言語は英語とした。ワークショップの内容は、大学院生による発表を毎年企画し、初年度は海外の最先端研究および教育、次年度は国内外の若手研究者の研究、最終年度はプログラム「英語プレゼンテーション演習」や「英語修辞学」を経験した大学院生の研究発表を中心に構成した。さらに司会やアナウンス・座長など運営・進行に大学院生が積極的にかかわるようにした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

「英語プレゼンテーション演習」を踏まえた大学院生の英語での研究発表の場として有用であった。